2009年11月18日(水)産経新聞(朝刊 25面)

安全安心を求めて

関西大社会安全学部の試み

複雑化する現代社会のリスク

モノ、カネだけでなく心の危機管理も不可欠

亀井克之教授（リスクマネジメント論）

リスクマネジメントは事故防止・危機管理の要諦である。

企業経営におけるリスクマネジメントの重要性を世界で初めて論じたのは、フランスの経営学者のファヨールだ。その先見性に着目し、フランスにおける理論の展開から、企業における実践までを研究し、著書にまとめた。また、さまざまな経営者へのインタビューから、独自の経営戦略型リスクマネジメントの理論を提起した。

これらの研究から、リスクマネジメントの本質を「決断」と見た。

かつて、企業のリスクマネジメントは、安全管理や保険管理に限定される傾向にあったが、今日では次に挙げるように大きな広がりを持つ。

かめい・かつゆき　昭和37年生まれ。関西大学大学院商学研究科博士課程修了。平成16年から総合情報学部教授。14年、渋沢クローデル賞（ルイ・ヴィトンジャパン特別賞）受賞。来年4月、社会安全学部・大学院社会安全研究科教授就任予定。博士（商学）。著書に「フランス企業の経営戦略とリスクマネジメント」、「経営者とリスクテーキング」など。

JR福知山線脱線事故の報告書漏洩問題で陳謝するJR西日本の真鍋精志副社長（飯田英男撮影）。亀井教授は「リスクマネジメントは社会全体の問題としてとらえるべきだ」と主張する

それは、戦略リスクを含むすべてのリスクを対象とした「統合型」「経営戦略型」の実践▽保険を補完するファイナンス手段の洗練▽モノ、カネのみならずヒト、ココロを対象にした「心の危機管理」の重視▽事故、災害の多発を受けた「災害管理型」の進展▽CSR（企業の社会的責任）、企業倫理、コンプライアンス、内部統制、といった隣接する概念との連携などである。

加えて、最近、新たに提唱され始めたのが「ソーシャル・リスクマネジメント」の考え方だ。

現代の複雑化、巨大化、社会化したリスクに対し、企業、自治体、国家、家庭、地域が連携して対応するという概念だ。

こうした広がりの中、研究テーマも多岐にわたっており、それぞれが現代社会におけるリスクマネジメントの課題を反映している。

ひとつは、企業におけるリスクマネジメントの組織体制とリスク情報開示のあり方の問題である。

もうひとつは、「ヒトとココロ」をめぐる諸問題である。

米国資本の進出騒動による南仏ワイン産業の危機を描く訳書「ワイン・ウォーズ：モンダヴィ事件」（平成21年、関西大学出版部）著者のオリビエ・トレスが設立し、全仏の注目を集める「中小企業経営者メンタルヘルス支援機構（AMAROK）」との共同研究を計画中だ。

このほか、高槻ミューズキャンパスに同時に開設される初等部を調査対象とすべく、関西大学経済・政治研究所に「子どもの安全」研究班を立ち上げた。さらに、科学研究費を得て、後継者不足に悩む中小企業の事業承継問題にも注力している。

昭和53年、関西大学で日本リスクマネジメント学会が設立され、今も学会本部が置かれている。筆者は学会事務局長を務め10年になる。安全・安心にかかわる諸分野から結集する研究者、学生・院生と力を合わせ、最新の国際規格ISO31000に準拠しながらも、日本の実情に見合った、リスクマネジメントの理論と実践を創り上げていきたい。